

結成！ 帰宅部

作
鈴木
浩太郎

登場人物

平 凡子	(ひら ぼんこ)	—	女子 A
大秀 信子	(おおひで のぶこ)	—	女子 B
勝 泰和	(かち たいわ)	—	女子 C
袖鳥 恵美	(ゆとり めぐみ)	—	女子 D
伊集院 光	(いじゅういん ひかり)	—	女子 E
勝 益代	(かち ますよ)	—	
田中 花子	(たなか はなこ)	—	

小さな部屋。

椅子を向かい合わせ、凡子と恵美が座っている。

恵美はメモを取りながら、凡子の話を聴く。

凡子

何がやりたいか、とかさ、将来どうなりたいか、なんて、ぶつちやけわかんないんだよね。だって、世の中に何があるかなんて知らないし、知らないのに将来の自分の姿も何もなくない？てか、なんでそんな急かされなきやいけないの？オレたち、あと何十年も生きるんでしょ？何十年もある人生のケツまで、なんでこんな数年で決めなきやいけないの？絶対にあり得ないって。絶対におかしい。

恵美

ふむふむ。

凡子

て言っても、世の中はもうそういう流れでできあがってるし、そういうシステムになってるわけじゃん？

恵美

ふむふむ。

凡子

だから逆らうのは無理なんだよね。あ、いや、逆らってもいいんだけど、それって、ほら…なかなか…ハイ…ハイ…。

恵美

リスク？

凡子

ビスコじゃん？

恵美

おいしそうですね。

凡子 わけないじゃん。ハイビスコはノートリンなんだから。

恵美 は？

凡子 でも、仲間集めてクレーターとか起こせば、そういう流れ

も変えられるかもだけどね。

恵美 クーデターですね。

凡子 食って出るって、それ、ゲロじゃん。

恵美 続けてください。

凡子 でさ、そういうクレーターとか起こす奴って、今いないじ

ゃん？ 疲れるし、めんどいし。

恵美 まあ…。

凡子 なんにネットとか使って文句言う奴は多いの。文句だけで

なんにもできねえ奴。オレ、あれ、不思議でさ。クレータ

ーよりよっぽどめんどくせえって思うの。

恵美 ふむふむ。

凡子 今、オレたちに必要なのって、考える時間じゃね？（スマ

ホを取り出して）こんなの縛られないでさ。

恵美 それが、平さんが帰宅部を立ち上げた理由ですか？

凡子 そつ。オレ、嫌なんだよ、こんなことで気を遣うの。寝て

る時、飯食ってる時、勉強してる時、買い物してる時、所

構わずブーブー通知が鳴ってさ。

女子A・B・C・D・E、

スマホを手に凡子を取り巻くように現れる。

女子A 今何してる？私はデイズニー。誰と来てるかは内緒だけだね。

女子B おもしろいアプリ発見。拡散希望。

女子C ねえ、あいつ、また未読スルーしてるんだけど。

女子D あいつ、絶対ぶりっ子だよね。ムカつく。

女子E てか、(スマホを指して) こういうの更新めんどいよね。全然興味ない。

女子C とか言って休日になると？

女子D いつもとメイク変えてみました(自撮り)。

凡子、女子たちを振り払うように立ち上がる。

凡子 知らねえよ。知りたくもねえ。てか、気持ち悪いんだよ。

っただけ自分知ってほしいんだ。っただけ人の反応を求めてんだ。

恵美 平さん、落ち着いて。

女子たち、凡子に詰め寄る。

女子E そんなに言うなら、やらなきゃいいじゃん。

女子B そうだよ、辞めれば？

凡子 辞めたら辞めたで、アウエイ感半端ないのが現代。

女子D 別に無理してまでやる必要ないって。

凡子 でも、いざという時に相談できる相手がないのは嫌だ。

女子C じゃあ、家族に縋れば？

凡子 オレ、反抗期なう。

一同 わがまま。

凡子 そう、オレ、わがまま。オレ、わがままだから、オレだけの居場所が必要だったのさ。

凡子、正面を向き、仁王立ちになる。

凡子

十倉女子全校の教師と生徒に告ぐ！オレは、これよりオレにとって都合の良い部を創設する！その名も帰宅部！部員になる者は、まるで家族が留守の家のような寛げる環境を部内に築かなければならない！

凡子、右手の人差し指を立て、前方へ突き出す。

凡子　オレのわがままに付き合う者、この指、とーまれ！

女子たち、はっと凡子を見やる。

女子Aは信子に転じ、弾むように凡子のもとへ。

信子　なんて潔いの。

信子、凡子の人差し指を掴む。

女子Bは泰和に転じ、半ば睨みながら凡子ににじり寄る。

泰和　ああ、気に入ったよ。

泰和、力いっぱい信子に続く。

信子　痛い痛い痛い。

凡子　折れる折れる折れる。

泰和　おっと、わりい。

泰和、手を離す。

女子C・D・Eは、呆れながら去る。

泰和　とりあえずは、これだけか。

信子　そのようね。

凡子　いいのかい、あんたら。オレのわがまま、相当過酷だぜ。

泰和　はんっ。受験勉強に比べたら、かわいいもんだ。

凡子　え…。

信子　わたしも部長を引退して退屈していたところ。

凡子　ちよつと待つて。二人とも、何年？

二人　三年。

凡子　ごめんなさい、オレ、二年なんです。二年の分際で生意気で、ほんとすみません。

信子　気にしないで。わたしは好きで集まったんだから。

泰和　そういうこと。気楽にいこうよ、気楽にさ。

泰和、力強く凡子と肩を組む。

凡子　いててててて。

信子　なんでいちいち力を入れるの。

信子、泰和を凡子から引き離す。

泰和

いやあ、わりい、わりい。元柔道部だからさ、加減てのがわかんないんだ。

凡子

二人とも喧嘩しないで。仲良くしましょう。

泰和

だよな。同じ部の部員になるわけだし。

凡子

これからよろしくお願いします。えーと…。

泰和

あたしは、勝。

凡子

勝さん。

信子

大秀信子です。

凡子

大秀さんですね。よろしくお願いします。オレは、平凡子

です。

泰和

固いなあ。あんた、部長なんだから、学年なんて気にしないで、もっと堂々と構えなつて。

信子

そういう威圧的な態度が部長を恐がらせるんですよ。

泰和

あたしのどこが威圧的だって言うの。

凡子

大丈夫、大丈夫ですから。オレ、別に恐がってないですから。

信子

だったら、もっとしつかりして。あなたが遠慮していたら

凡子

なんのために創られた部か、わからないじゃない。

信子

なんのために創られた部か、わからないじゃない。

凡子 あ、はい…。

泰和 さあ、部長。あたしたちは、何をすればいいですか。買い

凡子 出しですか、肩のみですか。

泰和 いや、買い出しも肩のみも結構です。

泰和 じゃあ、何を。

凡子 そうですね…ではですね…。みなさん、寝ましょう。

泰和 は？

凡子 寝ましょう。

信子 いいね、お昼寝？

凡子 はい。

泰和 ちよちよちよちよちよちよちよ。なに、昼寝？

凡子 寝ましょう。

信子 賛成。

泰和 なにすんなり受け入れてんの。

凡子 寝たくありませんか。

泰和 寝たくありませんわ。あ、そうか。あれか。部長、あんた、

凡子 寝てる間にしてほしいことがあるんだな。

別子 別に。

泰和 別にか。なんで会って間もない奴と放課後の部室で寝なきやいけないんだ。

凡子 おやすみなさい。
泰和 無視か。

凡子、床に横たわる。

信子 おやすみなさい。
泰和 飲み込み早過ぎだろ。

信子、凡子に倣う。

凡子 こうして、約一年半前、オレのオレによるオレのための帰宅部は動き始めた。
恵美 平さん、寝顔がこのうえなく不細工です。

静寂が部室を包み込む。

泰和 なに……。なんなの、この画。
凡子 ……。
信子 ……。
泰和 ねえ、マジで寝るつもり？

凡子 ……。

信子 ……。

泰和 寝るなら家で寝りゃいいじゃん。

凡子 オレ、家、嫌いです。

信子 わたしも。

泰和 なんなんだよ、調子狂うなあ。

泰和、凡子に袈裟固めを決める。

凡子 いててててて。

信子 何してるの。

信子、飛び起き、止めに入る。

泰和 あんた、どういうつもり？

信子 離しなさいよ。

泰和 自分のわがまま叶えるために、この部をつくったんじゃないの？

凡子 そうですよ。

信子 離しなさいって。

信子、強引に泰和を凡子から引き離す。

泰和　　いてえな。

信子　痛がつてるのは部長でしょ。あなた、何考えてんのよ。

泰和　　おまえ、少し黙ってるよ。

泰和、信子を突き飛ばす。

信子　　きやつ。

凡子、信子を支える。

凡子　　やめてください。

泰和　　部員と昼寝をするのが、あんたのわがままなわけ？

凡子　　それは…まあ…とりあえず今は…。

泰和　　じゃあ、次は？次はどんなわがままを用意してんの？

凡子　　まだ具体的には考えてませんけど…。

泰和　　あたしたちをパシるんじゃないの？

凡子　　え、そんな、とんでもない。

泰和　　あたしたちが年上だから？

凡子

そうじゃないですって。

信子

もういいわ。あなた、この部にどんな先入観を抱いているのか知らないけど、輪を乱すくらいならさっさと出ていきなさいよ。

泰和

端からそのつもりです。こんなわけのわからないとこ、関わるだけ時間の無駄だわ。

凡子

あの、期待を裏切ったのなら謝ります。でも、大秀さんを突き飛ばしたことは、ちゃんと謝ってください。

は？

信子

部長、わたしのことはいいから。

凡子

謝ってください。

泰和

あのさ、誰のせいで、あたしがこんなにムカついてるのかわからないわけ？ぶっちゃけさ、あたし、あんたを潰しに来たんだよ。なに、帰宅部って。なに、オレのわがままに付き合うって。あんた、ガキの分際で生意気なんだよ。どこが生意気なの。部長はまだ「昼寝をしよう」としか言っていないじゃない。

泰和

それがムカつくんだよ。こっちは本気で潰しに来てんのに拍子抜けもいところだ。

凡子

二人とも、すみませんでした。オレが、こんなわけのわか

信子
らない部を創ったせいで、二人に迷惑を掛けてしまつて。
なんで部長が謝るのよ。

泰和
本当だよ。おかげで受験勉強が遅れたしさ。

信子
そんなの自分の責任でしょ。

凡子
オレ、自分の居場所が欲しかつただけなんです。わがまま

つて言つても、何かを強いるつもりはなくて、ただ本音で
ぶつちやけあつて、でも必要以上に踏み込まない、そんな
居心地の良い関係を求めてこの部を創つたんです。

泰和
人を巻き込んでまでやるようなことじゃない？

凡子
ですよね。でも、独りだと不安だし、いろんなことを誰か
とゆつくり考え合う時間と場所が、オレには必要だと思つ
て。

泰和
それこそわがままだな。

凡子
はい、わがままだと思います。

泰和
そのわがままに振り回されたと思うと、マジでムカつくわ。
あなたが勝手に首を突っ込んできただけでしょ。

泰和
ああ、そうだよ。まさかこんな肩透かしを食らうなんて思
いもしないでな。腹を立てて損したわ。

泰和、部室を後にする。

信子 待ちなさいよ。

凡子 大秀さん、いいですよ。

信子 あなたがよくても、わたしがよくないの。

信子、泰和を追って去る。

恵美 大変でしたね。

凡子 ま、なんて言うか、産みの苦しみてやつ？

恵美 でも、勝さんは、戻ってきたんですよね？

凡子 うん。それも次の日にはね。

恵美 えっ…。

泰和、入ってくる。

手に持つ数冊の旅行パンフレットを凡子に投げつける。

旅行パンフレットは床に散らばる。

泰和 それでも読んで少しは勉強しな。

恵美 なんですか、これ。

恵美、パンフレットを拾う。

泰和、ぎよっとする。

泰和 あーっ、パンフレットが浮いた！

凡子 入ってきちゃ駄目だって。

恵美 これ、旅行のパンフレットですよ。

凡子 いいから置いて。

泰和 なまんだ、なまんだ、なまんだ。

恵美、渋々パンフレットを置く。

凡子 (泰和に) と言う仕掛けでした。

泰和 おまえ、馬鹿にしてんのか。

凡子 してません。それよりどうしたんです、これ。

泰和 パンフだよ。

凡子 見ればわかります。

泰和 少しは外見ろってこと。

凡子 は？

泰和 おまえさ、自分の居場所がどうか言ってたけど、そんなの敢えてつくるようなもんじゃないんだよ。見つけるの、自分で。

凡子
泰和
凡子
泰和

いや、見つけようと思って、この部を創ったんですよ。
違うだろ。見つけてもらおうと思って、だろ。

はっ！

はっ、じゃないよ。自分の足を使わないで欲しいものが向こうから転がってくるなんてこと、絶対にならないからな。じやっ。

泰和、踵を返す。

凡子
泰和
凡子
泰和
凡子
泰和
凡子
泰和
凡子
泰和

あの、大秀さんに何か言われたんですか。

別に。あたしの勝手な思いつきだよ。

勝さん、あの、よかったら、いっしょに行きませんか。

(振り向き) は？

せっかく入部したわけですし。

もう退部したよ。

承認してません。

はあ？

お願いします。なんか、勝さんとなら楽しくできそうな気がするので。

あたしはしないね。

凡子　　お願いします。

泰和　　：しようがないなあ。

凡子　　よかった。ちよろい。

泰和　　あ？

凡子　　で、どこに行きます？デイズニーとか、USJとか？

凡子、腰を下ろして、パンフレットを手に取る。

凡子　　あ、いちご狩りとかしたことない。

泰和　　おまえさ、友達いないわけ？

凡子　　どういふのを友達ってイメージしてるのかわかりませんが、普通に付き合ってる子ならいますよ、それなりに。

泰和、凡子の向かいに腰を下ろす。

泰和　　そいつらと遊びに行ったりしないの？

凡子　　行きましたよ、カラオケとか。付き合いで、ですけど。

泰和　　なんか棘のある言い方するな。

凡子　　あんなの時間の無駄じゃないですか。駄目なんですよ、オレ。何をするにも意味を求めちゃうんです。

泰和 そんなこと、考える方がよっぽど時間の無駄だわ。
凡子 だから必要なことだけしかしないようにしたんです。

泰和、パンフレット手に取り、眺め始める。

泰和 おまえ、やっぱ外見た方がいい。遊びが無さ過ぎる。
凡子 勝さんは考えたりしないんですか。
泰和 あたしは余計なことは考えない。やりたいかやりたくないか、楽しいか楽しくないか、ただそれだけ。

信子、入ってくる。

信子 お疲れ様です。あ、泰ちゃん、来たんだ。
泰和 なんだよ。
凡子 泰ちゃん？
信子 勝さん、下の名前が泰和って言うんだって。
凡子 へえ、勝泰和さん…。
泰和 あんまフルネームで言わないで。めちやくちや勝ちたい奴みたいで嫌なんだよ。
信子 なになにに、どこかに行くの？

凡子 泰和 信子 凡子 泰和 信子 凡子 泰和 信子 凡子 泰和 信子 凡子 泰和 信子 凡子 泰和 信子 凡子 泰和 信子

勝さんが持つてきてくれたんです。

へえ。昨日はあんなに牙を剥いていたのに極端だね。
うるさいわ。

勝泰和。

おまえ、人の名前、馬鹿にしてるだろ。

してないよー。

あ、これ、行きたい。稲川淳二の怪談バスツアー。

えー、何それー。

これなら三人でも予算で行けるよ。

あたしを入れるな。(立ち上がり) もう帰るわ。

えっ。

なんで？わたし、来たばかりなのに。

今日、宿題が多いんだよ。

あとでやればいいじゃないですか。

予備校の宿題もあるの。

それもあとでいいですよ。

あのな、受験生はやることだらけなんだよ。

そうですね。全部あとでやりましょう。

あとが地獄になるわ。

いいじゃない。その分先に天国味わえるんだから。

泰和 おまえも受験生だろ。よく落ち着いてられるな。

凡子 勝さんは、なんで受験するんですか？

泰和 え…。

凡子 将来やりたいこととか、決まってるんですか？

信子 勝ちたいんだよねえ。

泰和 うるさいわ。

凡子 どうなんですか？

泰和 いや…まあ…将来とかよくわからんけど、とりあえず大学

には行っておきたいかな…って。

凡子 へえ…。とりあえず。

泰和 なんだよ。文句あんの？

凡子 いや、ないない。ないですよ。

信子 わたしは、やっぱり国際事業に携わる仕事がしたいから、

かなあ。

泰和 いや、訊いてないから。

凡子 いや、是非訊きたいです。

信子 日本の市場はコモディティ化が進み過ぎてて、イノベーション

にはグローバル視野でのインフラ整備が必要だと思
うんだよね。だからエマーシングマーケットのリサーチ
はマストなわけだけど、今のままじゃフレームワークが整

凡子 っていないから、必要なベースを学びに行きたいの。
すげえ…。

泰和 出たよ、意識高い系…。

凡子 何言ってるか全然わかんなかった…。

信子 気にしないで。人によって興味を持つ分野って違うから。

泰和 ムカつく。なんかムカつく。

凡子 いいんですか、そんな立派な目標があるのに、こんなところで時間遣って。

信子 いいの、いいの。勉強なんて部活が終わった後にするものでしょ。

泰和 あたしら、受験生だよ？引退してるのが普通でしょ。

信子 自分で希望して入部しておいて、何言ってるの。

泰和 もう退部しました。

信子 (パンフレットを拾い) こんな持ってきておいて？

泰和 (信子からパンフレットを奪い) これは、個人的に行こう
と思って持ってたんだよ。こいつが勝手に奪ったの。

凡子 え…。

泰和 返せよな、ちくしょう。

泰和、パンフレット掻き集める。

信子 わたし、お菓子と飲み物買ってくるけど、部長と泰ちゃん、

リクエストある？

泰和 あたしは帰る。

凡子 信子さん、自分で買ってくるからいいですよ。

信子 部長、敬語禁止。それから、わたしたちを呼ぶ時はニツク

ネームで。

凡子 でも…。

泰和 あたしを巻き込まないでよ。

信子 気を遣っていたら、腹を割って過ごせないでしょ。

凡子 うーん…。じゃあ…わかりました。その代わり、二人も部

長って呼ぶのは、なしで。

泰和 二人って、あたしは…。

信子 オツケー。じゃあ、ボンちゃん、なに買ってくればいい？

凡子 いっしょに買いに行きま…こう。

信子 そうね、みんな買いに行こう！

信子、泰和の腕を掴む。

泰和 ちょっと待って。あたしは帰るって。

泰和、信子に引きずられ、共に去る。

凡子、後に続こうと歩き出す。

恵美　やりたいことがはつきりしてる人って、まっすぐですよね。

凡子、立ち止まる。

恵美　なんだかキラキラしていて、すごく眩しいです。

凡子　オレには、泰ちゃんの方が眩しく思えたよ。だって、あの
人、わからないことをわからないってはっきり言えるんだ
もん。

恵美　はあ…。

凡子　それってすごいことだぜ？ちゃんと自分のことをわかって
て、しかもそれを受け止められるんだから。オレは、それ
がなかなかできなかった。

信子と泰和が入ってくる。

信子　お疲れ様です。ねえ、今日はUNOしない？

泰和　なに、おまえ、持ってきたの？

信子 予算で買っちゃった。

信子、腰を下ろし、U N Oを取り出すと切り始める。
泰和、呆れながら腰を下ろす。

恵美 良い人が集まりましたね。

凡子 ああ。でも、悪いことをしたとも思う。

女子C・D・E、帰宅部を遠巻きに眺めながら現れる。

凡子 世の中のスペースとは違うオレのスペースにみんなを巻き

込んじまったからな。

恵美 平さん、それ、たぶんペースです。

信子 なにしてんの、ボンちゃん。早くやるよ。

凡子 あ、はい。

信子 はい？

凡子 あ…えと…。うん。

凡子、信子と泰和のもとへ腰を下ろす。
三人、U N Oを始める。

女子C 帰宅部って、あれ、なんなの？

女子D てか、帰宅部って部活じゃなくね？

女子E なんて、あれ、つくるの認められたの？

女子C 予算下りてるらしいよ。

女子E マジあり得ないんだけど。

女子D それより吹奏楽部の予算、もっと上げた方がよくない？

女子E 今年は関東大会進むらしいしね。

女子D すごいよね。

女子C 剣道部も全国大会出場だって。

女子E マジ応援するわ。

女子D 柔道部は、また予選で落ちたって。

女子E あそこ、ほんと弱いよね。

女子D 柔道部の元部長、今帰宅部にいるらしいよ。

女子C だからじゃん？

女子E だから弱いんだよ。あんなのが部長だったから。

女子D 帰宅部、要らなくね？

女子C 要らないよ。

女子E 要らない、要らない。

女子D ほんと要らない。

信子 UNO!

信子、高らかに残り一枚の手札を掲げる。

泰和　　ううわ、最悪。数字しかないよ。

泰和、手札を一枚置くと、
スマホを取り出し、不服そうに弄り始める。

泰和　　ボンは？

凡子　　オレもない。またノブの勝ちだ。

凡子が手札を一枚置くと同時に、
信子も最後の手札を置く。

信子　　イエーイ！あがりー！

凡子　　ノブ、強いなあ。

信子　　泰ちゃん、今、何時？

泰和　　五時半。

信子　　やばい、もう帰んなくちや。

信子、UNOを片付けていく。

凡子 予備校？

泰和 行つてたっけ？

信子 じゃなくてセミナー。学生向けの外資セミナーがあるの。

凡子 相変わらず意識高いね。

泰和 あたしも付いてこつかな。

凡子 え！

信子 来る？

泰和 うん。

凡子 あれ？泰ちゃん、外資に興味なんてあつたっけ？

泰和 ない。けど、自分探し…みたいなの？

信子 いいんじゃない。ボンちゃんも行く？

凡子 ううん…。いい…。

信子 じゃあ、また明日ね。

泰和 じゃあ。

信子と泰和、歩き出す。

声 待ちなさい！

ぎよつとする凡子。

信子と泰和も咄嗟に足を止める。

声 帰宅部の皆さま、少しお話をしましょう。

女子Cは声の主——光に転じ、部室に押し入ってくる。

光 お初お目に掛かります。いえ、あなたがたの方は、既に存じではなくて？

凡子 生徒会長…。

光 はい、よくできました。

女子Dは益代に、女子Eは花子に転じ、光の両脇に並ぶ。

泰和 (益代を見て) あっ…。

光 改めまして自己紹介申し上げます。私、第七十六代目の生徒会会長——伊集院光です。

益代 同好部部長の勝だにゃん。

凡子 (泰和を見て) 勝？

信子 (泰和を見て) 勝！

泰和 (目を逸らす)

花子

剣道部部長の田中だ。

光

今日は、帰宅部の皆さまに折り入ってお願いしたいことがあります。馳せ参じた次第にございます。

益代

お願いだぞ。

花子

命令だ、馬鹿野郎。

泰和

なんだと。

益代

こらこら、喧嘩はダメだぞお。

泰和

うるせえ！

益代

あーん、怒られたあ。

光

単刀直入に申し上げます。本日を以って帰宅部の皆さまはこの部室を明け渡し、また活動を廃止してください。

凡子

えっ…。

泰和

はあ？

光

ご存じのとおり、剣道部は全国大会出場を控え、そのコンディションを整えるためにも部室の拡充が不可欠なのです。また、同好部はコスプレや同人グッズが溢れ返っているため、保管場所を増やさなくてはなりません。

信子

そのためにわたしたちにここから立ち退けと？

光

はい。

泰和

いや、剣道部はともかく同好部の理由はおかしいでしょ。

益代

光

泰和

凡子

花子

益代

凡子

光

えーっ？

どこがですか？

聞かなきゃわからない？

あの、それって剣道部さんと同好部さんが、ここをシェアするってことですか？

譲ってやったんだ。

あ、ひどーい。

なら、オレたちもそのシェアに入っちゃ駄目ですか？

あなた、人の話を聴いていました？私は、活動そのものを廃止するように申し上げたのですよ。我が校は部活動に割くことができる教室の数も限られ、また慢性的な財政難に陥っています。そのような状況下で、旅だのゲームだの私的流用としかとれない使途に予算を充てる帰宅部に、部としての存在意義を認めるわけにはまいりません。

同好部に存在意義があるのかよ。

またそうやってオタクってだけで否定して。

オタクは市場価値があり、同好部の活動は社会貢献に繋が

ります。

いえーい。

はあ？

益代
泰和

光
益代
泰和

凡子 わかりません。そんなことを言ったら、剣道だって竹刀を振るだけのゲームじゃないですか。

花子 なに。

凡子 社会貢献には繋がりません。

光 部活動の価値基準は社会貢献だけではありません。

凡子 じゃあ、単なる自己満足じゃないですか。

花子 それはあんたのことだろ。

凡子 そうですよ。だから対等だって言ってるんです。

光 対等なわけがないでしょう。あなたが活動と称しているの

は、部を結成しなくてもできることです。

凡子 そんなのどんな部にも言えることじゃないですか。

花子 ふざけんなよ、この野郎。

花子、凡子に掴みかかる。

泰和、凡子を庇い、花子と組み合う。

信子 やめなさい。

信子、二人を引き離す。

益代

やーん。喧嘩、こわーい。

光

とにかく帰宅部は本日を以って廃止です。

凡子

それは先生たちも同じ考えですか？

光

当然でしょう。

凡子

あなたの予想じゃなくて。

光

予想ではなく決まったことです。

信子

決まったことなら、「廃止しろ」なんて発言にはならないはずよ。

凡子

そもそも先生たちが認めたから部を創れたわけだし、顧問

光

だって就いたんじゃない。

信子

：そうですね。それが例え一個人の私情に裏打ちされたものであったとしても。

凡子

……。

光

……え？

益代

調べさせていただきましたよ。

凡子

なんと、帰宅部の顧問は、この大秀信子の父親なのだ。

泰和

えーっ

光

でも、名字が違くない？

泰和

先生は公私を区別するために旧姓を名乗っているのです。

光

先生って婿入りだったの？

泰和

先生って婿入りだったの？

凡子　そこはいいよ。なんでそれが私情になるの？オレ、先生とはこのこと物理の授業でしか絡みないんだけど。

益代　絡みがあるのは、大秀信子の方なのだけ。

凡子　そうでしょうよ。父親なんだから。

光　そうではなく、平さん、あなたが大秀さんと関わりがあるのです。

信子　やめて。

凡子　は？え？どうゆこと？

光　大秀さんは――

信子　やめてって言うてるでしょ。

益代　平凡子、おまえのお姉さんだったのだけ。

凡子　え…。

信子　……。

惠美、不意にメモを落とす。

惠美　うそ…。

泰和、益代を突き飛ばす。

益代　　いったゝい。

泰和　　おまえはさ、どうしていつもわかんないんだよ。

益代　　はあ？なにが？

泰和　　少しは空気を読めよ。

益代　　読んでるから本当のこと言っただけじゃない。

泰和、益代の胸倉を掴む。

泰和　　本当かどうか知らないけど、人を困らせるのがそんなに楽

しいことか？

益代、泰和の手を振り払う。

益代　　昭和。お姉ちゃんって本当に昭和。なんでも型にはめて、

つまんない人間。

泰和　　おまえ、昭和知らないだろ。

泰和、再び益代に掴みかかるが、

花子が泰和の手を押さえる。

花子 姉妹喧嘩なら家でやれ。

泰和、花子の手を払い、背を向ける。

凡子 待つてよ。嘘でしょ？

光 詳しいことはご本人に直接伺うのがよろしいかと。ただし、先生方の間でもこの事実をご存じなのはごく一部。明るみになれば廃部はまず免れません。

泰和 どこが？私は、ただ不正を正しているだけです。

光 だが、強引だ。

花子 え？

光 おい。もしこの部があたしたちと対等だと言うなら、それを証明してみせろ。

花子 あなた、なにを勝手に――

光 存在意義さえあれば、部の存続は認められるんだろ？

花子 それは、そうですね…。

光 一週間だ。一週間後までに証明できなければ、校則に従って廃部してもらう。私情云々は自分たちで片を付ける。いいな。

花子、去る。

光

田中さん。…まあ、いいでしょう。では、一週間後に改めて伺いますので、それまでにこの部の進退について検討してください。くれぐれも冷静な判断をお願いしますよ。

光、去る。

益代

どっちつかず。

泰和

あ？

益代

柔道部なんかよりよっぽどお似合いよ。

益代、足早に去る。

泰和、益代の背を見つめ続ける。

恵美

同じ学校に、生き別れたお姉さんと本当のお父さんがいたなんて…。

凡子

驚いた？

恵美

だって、すごい偶然じゃないですか。

凡子

どうだろな。今思えば、案外偶然じゃないかも。

恵美 え？
凡子 オレ、母さんにこの学校勧められていたし。

凡子、メモを拾い、恵美に渡す。

凡子 母さん、キャビアツーマンだったんだけどさ。
恵美 キャリアウーマンですね。

凡子 赤ん坊だったノブの世話も家事も全部先生に丸投げにして
出た。でも、その時、母さんのお腹の中にはオレがいた
みたいで……。

信子 ボンちゃんが生まれていたことを数年後に知って、父さん
はとても後悔したって言ってた。だから、ボンちゃんがこ
の部を創ろうとした時、進んで力になろうとしたの。予算
だって、実は父さんが自分で――

凡子 ノブはどうして入部したの？
信子 え？

凡子 先生に言われたから？
信子 違う。あなたに会いたかったから。
凡子 なるほどね。どうりでうまくいき過ぎてると思った。

信子

隠すつもりはなかったんだよ。ただ、どう切り出したらい
いかわからなくて。

凡子

なんだろうな。支えてもらったんだろうけど、素直に喜べな
いや。

信子

だよね……。でもね、ボンちゃん。わたし、ボンちゃんに逢
うことができて本当に嬉しかったんだよ。これからも、わ
たしにできることがあるなら、なんでもしたいと思ってる
の。

凡子

いいよ。やめて。そんないきなりお姉さんぶられても困る
から。

信子

わたし、そんなつもりじゃ……。

凡子

もうやめよ。帰宅部、終わり。解散。会長の言うとおりに、
わざわざ部にする必要なかったわ。自分の居場所には、自
分さえ居ればいい。

信子

ボンちゃんの馬鹿！

信子、走り去る。

泰和

あー：なんかごちゃごちゃして、なんて言ったらいいかわ
かんないけど、とりあえず信子の気持ちに嘘はないと思う

よ。姉妹ってのは家族なんだから、逃げないでとことん話し合うってのも手なんじゃない？

今、ノブを姉だなんて受け入れられると思う？

泰和　それもそうか。ま、すぐに飲み込めるのは、無理な話だな。

泰和、凡子の肩を軽く叩く。

泰和

あとは、この部か。どうするかは部長のおまえが好きにすればいいけどさ、あたしは見つけられたと思ってるよ、居場所。少しだけどな。

泰和、外に向かって歩き出す。

泰和

じゃあな、ボン。

泰和、去る。

凡子

以上、これが帰宅部。

恵美

……。

凡子 どう？ひどいもんでしょ。幻滅した？

恵美 …… 廃部にするんですか？

凡子 うーん…。それしかないかなあ…。

恵美 ……。

凡子 まあ、部にしなくても、居場所は探せるからね。

恵美 でも、創るのって難しいじゃないですか。わたしは、創れ

なかったから、ここに来たんです。

恵美 それは…悪かったな…。

凡子 平さん、部員募集する時に掲げてたじゃないですか。「まるで

恵美 家族が留守の家のような寛げる環境を築く」って。わたし

し、すごい惹かれたんですよ。

凡子 いや、あれはオレのために部員に築いてもらおうと――

恵美 同じことですよ。一方通行じゃ「家族」にはなれませんか

ら。

凡子 ……。

恵美 平さんから聞いた話だけでも、勝さんも大秀さんも平さん

のことが大好きなんだなって伝わってきました。だから…

恵美 その…失礼ですが、今度は平さんが応えてもいいのかなっ

て。

凡子 めんどくせえ。そういうの、ほんとめんどくせえ。それじ

やあ、SNSと一緒にじゃん。

恵美 全然違いますよ。だって、ちゃんと声が聞こえるじゃないですか。

凡子 ……。

恵美 あ、出張ってすみません。なんか、話聴いてたら自分と重ねちゃって…。あ、おこがましいですよ。ほんとすみません。

凡子 あんま無暗に謝るなよ。

恵美 あ、すみません。

凡子 また…。

恵美 あ…。

少しして、恵美はメモをしまう。

恵美

今日は貴重なお話が聴けてよかったです。廃部は残念ですが、今後の自分を考えるいい機会になりました。では、失礼します。

踵を返す恵美。

と、泰和が入ってくる。

泰和 なに？体験入部？

恵美 あ、どうも…。

凡子 泰ちゃん…。

泰和 なかなかいい奴じゃん。

凡子 聴いてたの？

泰和 やべ、口が滑った。

凡子 わざとらしい…。

泰和 いやいよ明日だね。腹は決まった？

凡子 ……。

泰和 廃部にして自分でやるってなら付き合っっちゃってもいいよ。

その…なんだ、自分探してみたいの。

いいよ、独りでやるから。

泰和 なに拗ねてんの。

凡子 拗ねてない。

信子、入ってくる。

泰和 おお、ノブ。

恵美 あ、初めまして。

信子 初めまして。あの…。

泰和 体験入部だつてさ。

信子 ああ…。

恵美 一年の柚鳥恵美と言います。

信子 わたしは、三年の――

泰和 あー、なんだよ。なんでノブには自己紹介して、あたしにはしないわけ？

恵美 あ、すみません。

信子 もう、泰ちゃん、からかわない。

泰和 こいつも自分探し中なんだつてさ。外資セミナー、連れてってやろうよ。

信子 よかったら…。

恵美 えっと…是非…。

信子、ふと凡子に視線を移す。

凡子、気づいてさっと目を逸らす。

信子、UNOを取り出しながら、凡子に歩み寄る。

信子 ねえ、やらない？

凡子 ……。

泰和 おい、ボン、いつまで拗ねてんの。

凡子 …母さんに謝られた。

信子 え…。

凡子 ノブにも悪いことをしたって言った。

信子 ……。

凡子 今度、ゆっくり話そうってさ。

信子 父さんもおんなじこと言ってたよ。

凡子 ……そっか。

凡子、信子の手からUNOを取り、切り始める。

凡子 袖鳥ちゃんもやってく？

恵美 お邪魔じゃないですか？

泰和 邪魔なら誘わないって。やろやろ。

四人は、時計回りに凡子・泰和・信子・恵美の並びで

円形に腰をおろす。

凡子、カードを一人七枚ずつ配っていく。

凡子 いろいろ考えたんだけどさ。やっぱ帰宅部は帰宅部のまま

でいこう。

泰和

ほう。それは、どうして？

凡子

課題がはつきりするじゃん。フリーだと、なにから手を付けたらいいか、わからなくなるけどさ。

信子

確かに。

泰和

それじゃあ、最初の課題は帰宅部が他の部と対等であることをどう証明するか、だな。

凡子

そこ。

凡子、カードを配り終え、残った束を四人の中央に置く。

一同、カードを持ち扇状に開くと、ゲームを開始する。

凡子

まずは、部の活動を具体化。それから、予算の使い方が見直し。もう先生のお財布には頼らなくてもいいようにね。

信子

そうね。

泰和

このUNOとかは活動として続けるの？

凡子

正当な理由を見つけられるなら。

泰和

見つけるの？後付けなの？

信子

人生の駆け引きについて考察するため、とか？

凡子

すごい説得力！

泰和

いや、ならUNOじゃなくてもいいじゃん。

信子

凡子

泰和

凡子

恵美

凡子

泰和

恵美

凡子

信子

恵美

三人

泰和

凡子

泰和

恵美

四人

信子

じゃあ、じゃあ、人生の駆け引きは四色によってどのよう
に作用するかを考察するため、とか？
ど迫力！

馬鹿なの？ 国際事業って馬鹿なの？

そして最後の切り札は、柚鳥ちゃん。

え、わたし？

後輩がいると言うことは、部として存続が可能であること
を意味している。

一人だけどね。

それに、わたし、まだ入部すると決めたわけじゃ…。

あんだだけ濃い話をして入部しないと、どんだだけ？

明日の生徒会との勝負、同席してくれるよね？

すみません。明日は彼氏とデートなんで…。

彼氏いいいいいっ…

おま、女子高でどうやって出逢いつくったん？

泰ちゃん、次。

あ…。

中学からの付き合いで…。

中学ううううっ…

あ、UNO！

凡子 え、早っ！

泰和 また？これ、誰だよ、切ったの（手札を一枚置く）。

凡子 はあ…（手札を一枚置く）。

四人の会話が弾む中、
照明はゆっくりと落ちていき、やがて暗転。

恵美 すみません…。DRAW FOUR…。

三人 えええええっ…

— 幕 —